帝京科学大学紀要Vol.20（2024）pp.135-142

研究ノート

多様なあり方の保護者に寄り添える保育者・教育者を育成するための保育・教職課程への展望
―大学生を対象としたイメージ調査から―

[1]小湊真衣　[2]青山有希

[1]帝京科学大学
[2]東京女子体育大学

A Study on the Childcare and Teaching Curriculum to Nurture Childcare Providers and Educators who Can Accommodate Parents with Diverse Ways of Being
- Considerations from an image survey of college students -

[1]Mai KOMINATO　[2]Yuki AOYAMA

[1]Teikyo University of Science
[2]Tokyo Women's College of Physical Education

キーワード：ジェンダー・ステレオタイプ、ライフスタイル、性役割、保護者支援、保育・教職課程
Keywords：Gender Stereotypes, Lifestyle, Gender role, Parental Support, Childcare and Teaching Curriculum

【はじめに】

「男性は外で仕事」「女性は家で家事育児」に代表されるような固定的な性役割分担意識は日本においては高度経済成長期を通じて形成され、それによって性差に関する偏見や様々な社会制度・男性中心的労働慣行が維持されてきたといわれている[1)]。しかし世界的な男女平等意識の高まりの中、1985年に「雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等に関する法律」（通称：男女雇用機会均等法）が制定され、1986年に施行されたことにより、性別を理由にした差別は禁止されることとなった。その流れの中で例えば「看護婦」は「看護師」に、「保母」は「保育士」に、「スチュワーデス」は「客室乗務員」に名称が変更されるなど、仕事における性役割分担意識を変革していくための取り組みも行われてきた。また、「第５次男女共同参画基本計画策定に当たっての基本的な考え方（素案）」[2)] の中でも「性役割分担意識、偏見等及び過去の差別や経緯に起因して生じた男女の置かれた社会的状況の格差の解消に取り組まなければならない」という表現が用いられるなど、特に女性の活躍推進に向けた積極的な取り組みの推進が各領域に要請されている。

こうした社会の変化を受け、家族のあり方も多様化している。かつては家族を養うのは男性という考え方が主流であったが、近年は共働き世帯が増加傾向にあり、2018年には共働き世帯が夫のシングルインカムのみから成る世帯の２倍以上となった[3)]。同様に、育児は女性が中心となって行うものであるという考え方にも変化が訪れており、例えば厚生労働省を中心として「イクメン・プロジェクト」が立ち上げられたほか、男性の育児休暇の取得率の低さなどを受けて育児・介護休業法が2022年から３段階で施行されるなど、男性の積極的な育児参加も社会全体で推進されるようになってきている。ただし、厚生労働省の雇用機会等基本調査の2018年度データ[4)] によると、女性の育児休業取得率は82.2％であり、取得日数は10か月以上が７割であるのに対し、男性の育児休業取得率は6.18％であり、取得日数は２週間未満が７割を超えているなど、育児や就業形態において子育てをする保護者の性別による役割分担のアンバランスさは依然として課題の一つである。しかし、今後男女の働き方はさらに多様化し変化していくであろうことは、世界各国の取り組みや潮流を見ても明らかであると考えられることから、将来保育・教職の現場に関わることを目指して学修している学生は、家庭と連携しながら子どもの育ちを支えるためにも、多様なあり方の保護者一人ひとりに寄り添い信頼関係を築いていくことが求め

られるようになると考えられる。

しかしこれまでにはなかったような多様な家族のあり方や新しいライフスタイルのあり方は、一般的にネガティブなイメージを持たれる可能性が高いことが先行研究によって示されている。新しいあり方に対するネガティブなイメージに関する研究は、特に女性の新しいあり方に焦点を当てたものが多い。例えば、伝統的とされる女性は非伝統的とされる女性と比べて一貫して好意的に評価される傾向があること[5]や、非伝統的なあり方の女性は「有能だが、冷たい」とステレオタイプ化されたり、敵意的な偏見や差別の対象となるということが明らかにされている[6-8]。

またこれまでの先行研究では、男性の方が女性より伝統主義的である可能性が示されており[9, 10]、男性は女性よりジェンダーについてステレオタイプ化された考えを持ちやすく[11]、特に日本では女性の平等主義的意識変化は男性に先行し、男性の変化はそれに従う[12]といった指摘がされてきた。また、個人が日頃男女間の関係や新しい生き方を選択した女性についてどのような態度や信念を持っているかという要因も一時的な偏見の表出に影響すると考えられている[13]。

学校現場におけるジェンダー・ステレオタイプに関する先行研究として、例えば日本の公立小学校・中学校教員を対象とした調査の結果、「家事・育児は女性のほうが向いている」という項目に対して「そう思う」あるいは「ややそう思う」と回答した人の割合は79%[14]であったことが明らかになっている。また矢野（2019）は、小学校教諭を対象に質問紙調査を実施し、学校教育においてジェンダー・ステレオタイプが拡大・再生産される可能性について検討し、教師自身がステレオタイプ的なものの見方を捨てる必要があると指摘している[15]。ステレオタイプの存在は、目の前の人間に対する理解を妨げる要因の一つになると考えられているが、こうしたジェンダーに関するステレオタイプも他のステレオタイプと同様に、変化しづらく、かつ様々な文化において広く見られることも指摘されている。例えばLewin & Tragos（1987）は、これまで多くの国々がフェミニズムの影響を受けたにもかかわらず、男性性や女性性についてのジェンダー・ステレオタイプにはあまり変化が見られなかったことを報告しており[16]、Williams&Best（1990）も25カ国の男女大学生を対象に男性と女性を記述するパーソナリティ特性に関する調査を行った結果、ジェンダー・ステレオタイプは文化が異なっても共有される可能性を指摘している[17]。

Golombok&Fivush（1994）（小林・瀧野訳,1997）もその著作の中で「女性と男性がわれわれの社会で演ずる役割には多くの変化が起こっていても、ジェンダーに関連している特性や特徴についての考えはあまり大きな変化を受けていない」と述べているが[18]、ステレオタイプに関しては、それを肯定する程度に個人差や性差があることも報告されている。個人差に関して言えば、教育レベルが高くなるほど態度が平等主義的になる可能性[9]や、ステレオタイプが活性化するには条件があることも知られており、性差に関して言えば女性と競争状況にある男性は競争状況にない男性に比べて、キャリア志向女性よりも家庭志向女性に対する好意が高まる[19]といった報告もされている。性差に関しては他にも男子大学生を対象とした調査により、敵意的な態度が強い男性は自己に脅威がもたらされた際キャリア女性に対する「やさしさ」「あたたかさ」の評価を低める一方、敵意的な態度が弱い男性はキャリア女性の「やさしさ」や「あたたかさ」を高く評価する傾向が見られたことも明らかにされている[13]。

そこで将来、保育・教育の現場等において、従来からあるライフスタイルを選択した保護者だけでなく、新しい働き方や家族のあり方を選択した保護者への支援や連携を行う可能性がある学生を対象とし、様々なあり方を選択した保護者に対して抱いているイメージを検討するとともに、学生の性別や、学生自身が希望する家族のあり方や就労形態によってイメージにどのような違いが見られるのかについても検討することとした。

保育・教育現場においては問題行動やいじめ、登園しぶりや不登校、暴力行為や非行といった教育相談に関係するケースや、発達障害をはじめとした特別支援に関係するケースのほか、学習支援、生活支援や進路相談などあらゆる場面において保護者との連携が不可欠である。保育者や教育者が保護者と連携して子どもの育ちを支えていくためには保護者との相互理解および信頼関係の形成が重要となるが、保護者と相互理解を深めていこうとする際、保護者のあり方に対する教員側のステレオタイプがその阻害要因として機能する可能性があるため、まずは保護者に対する学生のイメージを明確にした上で将来多様な保護者の支援を行っていくための、保育教職科目における教育のあり方について検討を行うこととした。

【目的】

将来保育者もしくは教員として勤務することを目指して学修中の学生が様々な就労形態の保護者に対して抱いているイメージを検討することで、保育・教職過程における保護者支援や家庭支援関連科目における指導のあり方について考察すること。

【方法】

１．調査対象者

2019年７月から８月にかけ関東近郊の２つの大学の保育・教職課程で学ぶ学生に対し授業時間外の時間を用いてアンケート調査を実施した。

２．調査内容

調査の趣旨に関する説明と倫理的配慮に関する説明を行ったのち、調査協力に関する同意の確認を行い、同意が取れた者にのみアンケート調査への回答を依頼した。

アンケート調査でははじめに本人の年齢と性別を尋ねた。次に従来からある保護者の呼称として「父」「母」、従来からある女性保護者のライフスタイルとして「専業主婦（稼得労働に従事せず専ら家事や子育てを行う既婚女性）」のイメージを尋ねた。また新しい女性保護者の働き方として「バリキャリ（バリバリ働くキャリアウーマンの略）」、新しい男性保護者のあり方として「専業主夫（稼得労働に従事せず専ら家事や子育てを行う既婚男性）」、「イクメン（育児をするメンズ【男性】の略）」を設定し、それらに対するイメージについてSD法を用いて尋ねた。今回採用した肩書き以外にも従来からあるライフスタイルを示した呼称や新しいあり方を選択した保護者の名称は多くあるが、調査協力者の負担を考え、心理学関連分野において修士以上の学位を持つ研究者２名による協議をもって今回はこの６つの単語を取り上げることとした。

SD法に使用した形容詞対は井上・小林（1985）[20]の形容詞対を参考に男女どちらの保護者のイメージとしても適用できる形容詞として、また調査協力者の回答にかかる負担を勘案し、「積極的な-消極的な」、「活発な-不活発な」、「頼もしい-頼りない」、「きちんとした-だらしない」、「意欲的な-無気力な」、理性的な-感情的な」、「外交的な-内向的な」、「充実した-空虚な」、「自由な-不自由な」、「暖かい-冷たい」、「世話好きな-世話好きでない」、「幸福な-不幸な」の12対を選出した。質問紙ではポジティブまたはネガティブな意味を持つ形容詞が左右どちらかに固まらないよう、形容詞対のうち「意欲的な-無気力な」と「充実した-空虚な」の２対を逆転項目として配置した。左右に置かれた形容詞対に対し、例えば「積極的な-消極的な」の対であれば「非常に積極的な」「かなり積極的な」「やや積極的な」「やや消極的な」「かなり消極的な」「非常に消極的な」までのどれに当てはまると思うかを６件法で回答を求めた。

また、将来家庭を持つと仮定した場合の就労形態の希望について、「共働き」「シングルインカム」「その他」のうち、どの形態を希望するかを尋ね、「その他」を選択した対象者には自由記述でその詳細を尋ねた。また「シングルインカム」を希望した対象者には、主な稼ぎ手として自分とパートナーのどちらを想定しているかを尋ねた。

３．倫理的配慮

調査を実施するにあたっては帝京科学大学「人を対象とする研究倫理基準」の遵守および個人情報保護等の倫理的配慮を考慮し、個人が特定できる情報を収集せず、データは教育・研究目的以外には使用しないこと、調査への回答は任意であり回答しないことによる不利益は一切生じないこと、調査報告後データおよび調査紙は適切に処理すること等を書面および口頭にて説明し、同意が得られた対象者のデータのみを分析に使用した.

【結果】

学生128名（男性93名・女性34名・無回答１名）からの回答を得た。平均年齢は19.69歳（SD = 0.68）であった。回答に一部欠損があったものに関しては、その項目のみを分析から除外して集計を行った。

男性保護者と女性保護者に対するイメージについて、ポジティブ寄りの「非常に」を６点、「かなり」を５点、「やや」を４点、ネガティブ寄りの「やや」を３点、「かなり」を２点、「非常に」を１点として集計した。それぞれのイメージの平均を図１、図２に示す。なお、図にまとめるにあたり、形容詞対のうちポジティブな意味を持つものを右側に、ネガティブな意味を持つものを左側に配置した。

男性保護者の肩書きとなりえる「父」「主夫」「イクメン」に対するイメージはどれも平均が3.5以上であったことから、どの表現に対しても概ねポジティブなイメージを持たれている可能性が示唆された。またこの３つの単語の中では特に「イクメン」が、積極的で活発であり意欲的で頼もしくあるとともに暖かく世話好きであるといったポジティブなイ

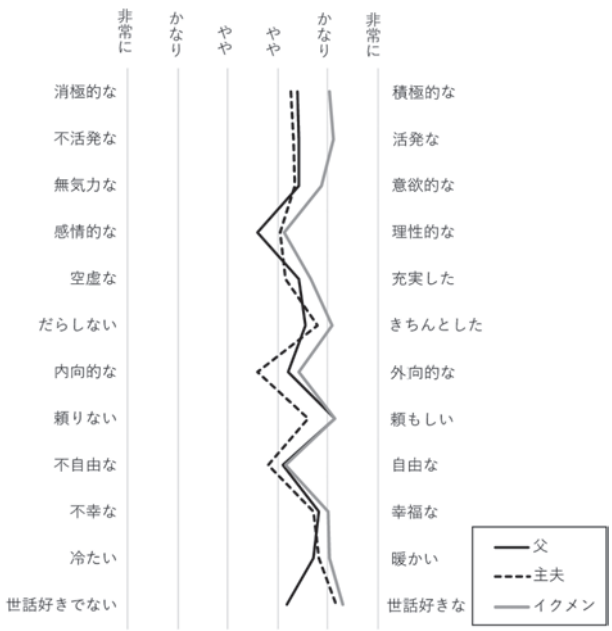

図１　男性保護者の肩書きに対するイメージ

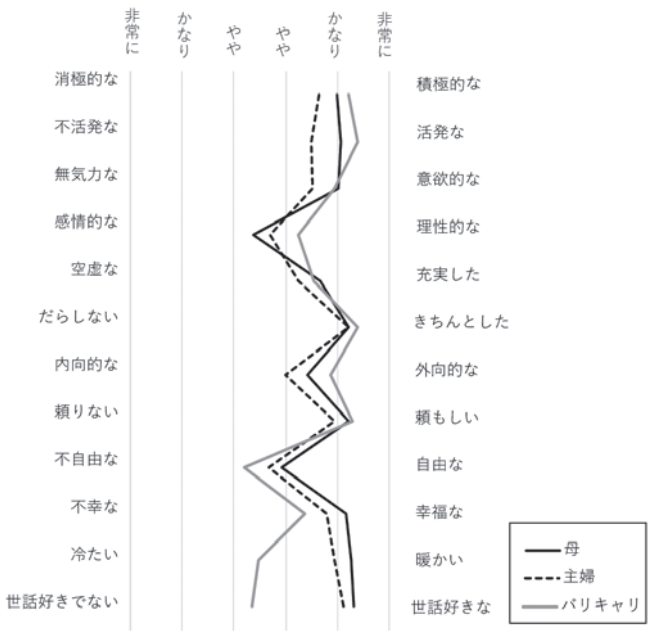

図２　女性保護者の肩書きに対するイメージ

メージを持たれている可能性が示唆された。同じく新しい男性保護者のあり方であると考えられる「主夫」は「外交的な」「頼もしい」「自由な」に対するイメージが「父」や「イクメン」よりも低い傾向が見受けられたが、概ねポジティブなイメージが形成されている傾向が示唆された。

女性保護者の肩書きとなりえる「母」「主婦」「バリキャリ」に関しては、「自由な」「世話好きな」の項目のみイメージの平均が3.5を下回っていたが、それ以外の項目では概ねポジティブなイメージを持たれていることが明らかとなった。またこの３つの表現の中では特に「バリキャリ」が積極的で活発であり、理性的で外向的である一方、「自由な」「幸福な」のイメージが低く、特に「暖かい」「世話好きな」に関しては「父」「主夫」「イクメン」における平均を下回るなど、ポジティブなイメージとややネガティブなイメージが併存している可能性が示唆された。

次に、男子学生と女子学生の保護者に対するイメージの差について検討するため対応のないt検定を行った結果を表１、表２に示す。Leveneの検定を行った結果、「父」の「頼もしい-頼りない」（$F = 4.105$, $p<.05$）、「意欲的な-無気力な」（$F = 4.461$, $p<.05$）、「主夫」の「意欲的な-無気力な」（$F = 6.395$, $p<.05$）、「暖かい-」冷たい」（$F = 14.631$, $p<.05$）、「幸福な-不幸な」（$F = 7.984$, $p<.05$）、「イクメン」の「外交的な-内向的な」（$F = 4.862$, $p<.05$）において等分散性が仮定されなかったが、それ以外の男性保護者に対するイメージおよび女性保護者に対するイメージの全ての項目では等分散性が仮定された。

「父」に関しては「理性的な-感情的な」においてのみ有意差が見受けられ（$t(124) = 1.997$, $p<.05$）、男子学生の方が女子学生よりも「父」に対して理性的なイメージを抱いている傾向が見受けられた。比較的新しい男性保護者のあり方である「主夫」については形容詞12対のうち９対において男女間で有意な差が見受けられ、全ての項目において女子学生の方が男子学生よりもポジティブなイメージを持っている可能性が示唆された。同じく比較的新しい男性保護者のあり方である「イクメン」に関しては「外向的な-内向的な」においてのみ有意な性差が見受けられ（$t(124) = 2.277$, $p<.05$）、女子学生の方が男子学生よりも「イクメン」に対して外向的なイメージを抱いている傾向が明らかとなった。

「母」「主婦」に関しては男子学生が持つイメージと女子学生が持つイメージとの間に有意な差が見受けられなかったが、比較的新しい女性保護者のあり方である「バリキャリ」に関しては「頼もしい-頼りない」においてのみ性別による有意差が見受けられ（$t(124) = 2.584$, $p<.05$）、女子学生の方が男子学生よりも「バリキャリ」に対してポジティブなイメージを抱いている傾向が明らかとなった。

将来希望する就労形態に関しては、回答があった男子学生のうち（無回答２名）54.95%が「共働き」を希望の就労形体として挙げ、43.96%が「シング

表1　男性保護者に対するイメージの性差

		父					主夫					イクメン				
		平均	SD	t値	p値		平均	SD	t値	p値		平均	SD	t値	p値	
積極的な−消極的な	男子学生	4.33	1.322	−0.659	0.511		4.05	1.456	−2.503	0.014	*	5.03	1.172	0.143	0.887	
	女子学生	4.50	1.080				4.76	1.281				5.00	1.044			
活発な−不活発な	男子学生	4.32	1.336	−1.338	0.183		4.14	1.480	−2.077	0.040	*	5.10	1.017	−0.100	0.921	
	女子学生	4.68	1.273				4.74	1.238				5.12	0.913			
頼もしい−頼りない	男子学生	5.17	0.868	0.486	0.630		4.40	1.300	−2.954	0.004	**	5.21	1.000	0.951	0.343	
	女子学生	5.06	1.254				5.15	1.132				5.00	1.279			
きちんとした−だらしない	男子学生	4.52	1.185	−0.430	0.668		4.63	1.213	−2.314	0.022	*	5.12	1.015	0.723	0.471	
	女子学生	4.62	1.155				5.18	1.029				4.97	1.058			
意欲的な−無気力な	男子学生	4.42	1.077	0.121	0.904		4.17	1.300	2.940	0.004	**	4.93	1.117	−0.653	0.515	
	女子学生	4.44	0.824				4.82	1.029				4.79	1.083			
理性的な−感情的な	男子学生	3.74	1.283	1.997	0.048	*	3.97	1.378	−1.135	0.259		4.22	1.481	1.187	0.238	
	女子学生	3.24	1.182				4.26	1.082				3.88	1.166			
外向的な−内向的な	男子学生	4.17	1.307	−0.476	0.635		3.37	1.518	−3.027	0.003	**	4.27	1.483	−2.277	0.026	*
	女子学生	4.29	1.194				4.26	1.310				4.85	1.184			
充実した−空虚な	男子学生	4.39	1.084	−0.656	0.513		3.93	1.191	3.248	0.001	**	4.71	1.134	−0.890	0.375	
	女子学生	4.53	1.080				4.68	0.976				4.50	1.212			
自由な−不自由な	男子学生	3.99	1.247	−1.469	0.144		3.79	1.434	−0.216	0.830		4.04	1.406	−1.719	0.088	
	女子学生	4.35	1.203				3.85	1.395				4.50	1.052			
暖かい−冷たい	男子学生	4.68	1.144	−0.616	0.539		4.65	1.109	−3.633	0.000	***	5.04	1.068	0.351	0.726	
	女子学生	4.82	1.290				5.24	0.654				4.97	0.937			
世話好きな−世話好きでない	男子学生	4.24	1.338	0.884	0.378		5.09	1.050	−1.500	0.136		5.39	0.889	1.676	0.096	
	女子学生	4.00	1.326				5.38	0.739				5.09	0.933			
幸福な−不幸な	男子学生	4.82	1.093	−0.028	0.978		4.58	1.184	−2.934	0.004	**	4.98	1.158	−0.370	0.712	
	女子学生	4.82	1.193				5.15	0.857				5.06	0.851			

Note.　数値が大きいほどポジティブなイメージ（形容詞対の左側寄り）であることを示す
*p<.05, **p<.01, ***p<.001

表2　女性保護者に対するイメージの性差

		母				主婦				バリキャリ				
		平均	SD	t値	p値	平均	SD	t値	p値	平均	SD	t値	p値	
積極的な−消極的な	男子学生	5.00	1.032	0.000	1.000	4.58	1.136	−1.062	0.291	5.18	1.179	−0.660	0.511	
	女子学生	5.00	0.985			4.82	1.114			5.32	0.912			
活発な−不活発な	男子学生	5.06	0.942	−0.122	0.903	4.40	1.273	−1.388	0.168	5.35	1.010	−0.491	0.624	
	女子学生	5.09	1.055			4.74	1.053			5.44	0.746			
頼もしい−頼りない	男子学生	5.16	0.863	−0.976	0.331	4.88	1.063	−1.317	0.190	5.15	0.971	−2.584	0.011	*
	女子学生	5.32	0.727			5.15	0.857			5.62	0.652			
きちんとした−だらしない	男子学生	5.22	0.976	0.046	0.963	5.14	0.984	−1.358	0.177	5.34	0.893	−0.777	0.439	
	女子学生	5.21	1.008			5.41	0.988			5.47	0.748			
意欲的な−無気力な	男子学生	5.06	0.895	−0.973	0.333	4.45	1.204	0.962	0.338	4.85	1.350	1.379	0.170	
	女子学生	4.88	1.038			4.68	1.065			5.21	1.122			
理性的な−感情的な	男子学生	3.44	1.425	0.828	0.409	3.74	1.405	0.328	0.744	4.22	1.525	−0.057	0.955	
	女子学生	3.21	1.166			3.65	1.203			4.24	1.689			
外向的な−内向的な	男子学生	4.37	1.307	−0.711	0.478	3.92	1.416	−0.695	0.488	4.82	1.309	−1.086	0.280	
	女子学生	4.56	1.375			4.12	1.343			5.09	1.083			
充実した−空虚な	男子学生	4.63	1.040	0.465	0.642	4.22	1.191	0.558	0.578	4.49	1.400	0.807	0.421	
	女子学生	4.74	1.189			4.35	1.178			4.71	1.142			
自由な−不自由な	男子学生	3.87	1.352	−0.795	0.428	3.76	1.385	1.020	0.310	3.15	1.596	−0.747	0.456	
	女子学生	4.09	1.422			3.47	1.398			3.38	1.349			
暖かい−冷たい	男子学生	5.28	0.864	0.443	0.659	4.90	1.076	−0.763	0.447	3.47	1.593	−0.010	0.992	
	女子学生	5.21	0.729			5.06	0.886			3.47	1.440			
世話好きな−世話好きでない	男子学生	5.34	0.840	0.761	0.448	5.10	1.055	−0.238	0.812	3.42	1.447	1.042	0.299	
	女子学生	5.21	1.067			5.15	0.857			3.12	1.513			
幸福な−不幸な	男子学生	5.17	0.996	0.132	0.895	4.77	1.146	−0.500	0.618	4.31	1.236	−1.070	0.287	
	女子学生	5.15	0.784			4.88	1.066			4.56	0.960			

Note.　数値が大きいほどポジティブなイメージ（形容詞対の左側寄り）であることを示す
*p<.05

ルインカム」希望と回答していた。また、回答があった女子学生のうち（無回答１名）最も多かった回答は「共働き」の69.70%であり、「シングルインカム」は30.30%であった。全体としてみると58.87%が「共働き」を、40.32%が「シングルインカム」を希望の就労形態として挙げていた。また希望する就労形態として「シングルインカム」を選択した男子学生39名のうち97.44%（38名）が主な稼

ぎ手として「自分」を挙げており、女子学生の100%が主な稼ぎ手として「パートナー」を選択していた。

希望する就労形態を「共働き」とした学生72名と「シングルインカム」とした学生49名の、保護者に対するイメージの差について検討した結果、「主婦」の「幸福な-不幸な」にのみ有意な差が見受けられ（t（119）＝1.995, p<.05)、「シングルインカム」を希望する学生の方が「主婦」に対して幸福なイメージを抱いている傾向が明らかとなった。このことから、学生自身が希望している就労形態は保護者のあり方に対するイメージの一部に関与している可能性が示唆された。

【考察】

本調査は、将来保育現場や教育現場で働くことを目指して学修中の学生が、様々な就労形態の保護者に対して抱くイメージについて検討することで、保育・教職課程における指導のあり方について考察することを目的として実施された。

調査の結果、今回調査協力者となった保育・教職課程の学生は「父」「主夫」「イクメン」対して比較的ポジティブなイメージを持っており、特に「イクメン」に対してはポジティブなイメージが強い傾向が明らかとなった。「母」「主婦」「バリキャリ」に関しても概ねポジティブなイメージを持たれていることが明らかとなったが、「バリキャリ」はポジティブなイメージがある一方で、「暖かい」「世話好きな」といった要素についてはそれほど肯定的なイメージを持たれていない可能性が示唆された。

今回の調査では調査協力者の負担軽減の観点から回答の理由について尋ねなかったため、今回このような結果が得られた理由の考察を行うことが今後の検討課題であるが、今回の結果が得られた要因としては例えば「イクメン」や「主夫」は家事育児を積極的に行うあり方であることから「主婦」や「母」同様の「暖かい」「優しい」イメージが付加された可能性が考えられる。一方「バリキャリ」は一般に仕事に専念している女性のあり方であることから、「主婦」や「母」が持つ「温かい」「世話好きな」といったイメージが弱くなった可能性が考えられるだろう。男性保護者の比較的新しいあり方である「イクメン」や「主夫」に対するポジティブなイメージは、保護者との相互理解や保護者支援の場において肯定的な影響を与える可能性を期待することができる一方で、仕事熱心な母親に対するネガティブなイメージは先入観やステレオタイプとして作用し、そうしたあり方を選択した保護者との信頼関係形成におけるマイナス要因となる可能性も否定できない。

性差に関してこれまでの先行研究では、男性の方が女性より伝統主義的であり[9, 10]、男性は女性よりジェンダーについてステレオタイプ化された考えを持ちやすい[11]ことが指摘されていたが、今回の調査でも男性保護者の比較的新しいあり方である「主夫」のイメージにおいて、女子学生の方が男子学生よりもポジティブなイメージを持っている可能性が示され、同じく保護者の比較的新しいあり方である「イクメン」「バリキャリ」についても女子学生の方が男子学生よりも有意にポジティブなイメージを形成している形容詞があることが確認された。

今回の調査は調査対象者が限定的であることから結果の過度な一般化は避けるべきであるが、平等主義的信念を持つことが判断や行動に対するステレオタイプの影響を避けることにつながるという先行研究[21]もあることから、保育・教職課程で学ぶ学生が今後様々なあり方の保護者に寄り添い支援を行っていくためには、保育・教職課程において平和主義的な信念について学生同士が学び合う機会を設けるとともに、特定のあり方や特定の性別に対する自らの態度や考え方について自覚し、それを振り返る機会を作ることも有効であろうと考えられる。

また例えば三島（2007）[22]は初等教育実習に参加する前後で学生の「授業」「教師」「子ども」に対するイメージの一部が変容し、例えば子どもに対するイメージは、ステレオタイプ的なものからポジティブ・ネガティブ両面からありのままの姿を捉えられるようになっていたことを報告していることから、授業の中で多様なあり方の保護者や新しいライフスタイルを選択している保護者から直接話を聞いたり、交流したりする機会を作るとともに、そうした機会を増やしていくことも、多様な家庭を支援できる保育者教育者を養成する上で有効であると考えられよう。

ステレオタイプの活性は意識的に統制することができないため、ステレオタイプ的知識の構造自体を修正するには時間をかけて繰り返し新しい知識を学習することが必要だとされている[23, 24]。したがって保育・教職課程においては将来学生がどのようなあり方の保護者に対しても平等な態度で接し、寄り添い、信頼関係を築き、保護者と連携しながら子どもの発達や学習を支援していけるよう、学生が自らの持つステレオタイプと向き合い、理論と実践およ

び体験を組み合わせる中で自身のものの考え方を更新していくことができるような授業のあり方を検討していく必要があると言えるだろう。

また今回はイメージを測定するために取り上げた保護者の肩書きが限定的であったため、今後はより多様な家族や家庭および保護者のあり方のほか、保護者の肩書きや属性に対するイメージについても検討することで、より一層多様化する社会の中で保育者・教職者として活躍する学生の指導のあり方について検討していくことが必要であると考えられる。

謝辞

本調査の趣旨にご賛同いただき、ご協力いただきました学生の皆さんに心より感謝申し上げます。また、貴重なご意見をいただきました査読者の先生方に感謝申し上げます。

【付記】

本調査の一部は日本子育て学会第12回大会（小湊真衣,青山有希：大学生の家族・子育て・ワークライフバランスへの意識.*日本子育て学会第12回大会発表論文集*：48-49, 2020.）において発表された。

参考文献

1）内閣府男女共同参画局：第2部　施策の基本的方向と具体的な取組　Iあらゆる分野における女性の活躍第1分野　男性中心型労働慣行等の変革と女性の活躍，*第4次男女共同参画基本計画*（平成27年12月25日決定）,2015, pp6-11.

2）男女共同参画会議　第5次基本計画策定専門調査会：第5次男女共同参画基本計画策定に当たっての基本的な考え方（素案）, 2020, pp13

3）内閣府：令和元年度版　男女共同参画白書, 2019.

4）厚生労働省：平成30年度雇用均等基本調査, 2019.

5）Haddock, G.＆Zanna, M.P.：Preferring “housewives” to “feminist” : Categorization and the favorability of attitudes toward women. *Psychology of Women Quarterly*, l8, : 25-52, 1994.

6）Glick, P., & Fiske, S. T. ：The Ambivalent Sexism Inventory: Differentiating hostile and benevolent sexism. *Journal of Personality and Social Psychoogy*, 70 : 491-512, 1996.

7）Glick,P., & Fiske,S.T.：Ambivalent sexism. *Advances in experimental social psychology* : 33 : 115–188, 2001.

8）Glick,P., & Fiske, S.T.：An ambivalent alliance: Hostile and benevolent sexism as complementary justifications for gender inequality. *American Psychologis*t, 56 : 109-118, 2001.

9）東清和,鈴木淳子：性役割態度研究の展望.*心理学研究*. 62:270-276, 1991.

10）Davis,N.J., & Robinson, R.V.：Men’s and women’s consciousness of gender inequality: Austria, West Germany, Great Britain,amd the United States. *American Sociological Review*, 56:72-84, 1991.

11）Basow,S.A.. Gender: Stereotypes and roles. 3rd ed. Pacific Grove, CA:Brooks/Cole, 1992.

12）児島和人：意識変化の方向・課程・将来. NHK世論調査部（編），*現代日本人の意識構造*，日本放送出版協会，1985,pp183-213.

13）高林久美子：自己への脅威が女性に対する偏見に及ぼす効果：両面価値的性差別理論からの検討, *社会心理学研究*. 23（2）:199-129,2007.

14）独立行政法人　国立女性教育会館:学校教員のキャリアと生活に関する調査　結果の概要, 2018, pp106.

15）矢野円郁：小学校教諭におけるジェンダー意識と教科学習能力の性差に対する認識の関係-ジェンダー・ステレオタイプの再生産防止のために-, *神戸女学院大学論集*. 66（1）, 73-84,2019.

16）Lewin, M., & Tragos, L. M. :Has the feminist movement influenced adolescent sex role attitudes? : A reassessment after a quarter century. *Sex Roles,* 16, 125-135, 1987.

17）Williams,J.E.,&Best, D. L.: *Measuring sex stereotypes. A multination study.* Newbury Park, CA: Sage. 1990.

18）Golombok, S., & Fivush, R.: *Gender development*. New York: Cambridge University Press.,1994（ゴロンボクS.&フィバッシュR.小林芳郎・瀧野揚三（訳）: ジェンダーの発達心理学 田研出版,1997.

19）沼崎誠,工藤恵理子:女性との競争状況が男性の家庭志向型女性・キャリア志向型女性に対する好意に及ぼす効果.*日本グループダイナミックス学会大会発表論文集*, 246-247, 1995.

20）井上正明,小林利宣:日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観．*教育心理学研究*, 33（3）:253-260, 1985.

21）野寺綾,唐沢かおり:性別と男女平等主義的態度がジェンダーステレオタイプ活性におよぼす影響. *人間環境学研究*, 2（2）:9-14,2004.
22）三島知剛:教育実習生の実習前後の授業・教師・子どもイメージの変容. *日本教育工学会論文誌*, 31（1）:107-114, 2007.
23）Devine,P. :Stereotypes and prejudice: Their automatic and controlled components. *Journal of Personality & Social Psychology*, 56, :5-18, 1989.
24）Kawakami, K., Dion, K. L., & Dovidio, J. F. :Racial prejudice and stereotype activation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 24:407-416,1998.